

いました。

これからが内地での防衛勤務で、昭和二十年二月二十八日、「軍令陸甲第三十四号臨時動員並びに東北第五十九部隊復員下令」により、四月八日、臨時召集により東北第五十九部隊に応召となりました。そして同日「護仙第二二八五九部隊」に充用されて船山隊に編入となりました。

昭和二十年四月十日、この編成は完結となり、十九日に山形から青森県三戸郡尻内に到着、内地防衛の任務に就きました。特に訓練もなく、塹壕や防空壕掘りなどをして、終戦を迎えました。

帰ってからも大工の仕事に復帰しましたが、釘やボルトなどの金物がなくて、仕事に困りました。軍歴の中で、次のような章を受けています。

昭和十五年八月一日 陸軍兵精勳章

昭和十六年六月一日 陸軍兵精勳章

昭和十八年二月十日 陸軍兵精勳章

三月十九日 善行証書

三月十九日 兵科下士官適性証書

私の五年三カ月の青春

兵庫県 西 納 鷹 雄

第一章 生い立ち

私は大正十（一九二一）年二月二十三日、農家の末っ子の四男として姫路市で生まれました。

入隊当時、家族は、祖父母、父母、兄二人で、長男は北支で戦死しており七人家族でした。祖父母、父母は農業専業、兄二人は会社勤めをしながら農作業の手伝い、私は旧制中学校卒業と同時に神戸の造船会社に勤務しておりました。

姫路市といえば「姫路城」皆さんご存知の慶長年間に建てられた国宝、またユネスコの世界遺産に登録されており、白鷺城の異名を持つことはあまりにも有名です。その他赤煉瓦の美術館、歴史博物館、文学館、好古園等観光ルートバスも走っております。

第二章 公主嶺駐屯期間

昭和十七年三月から昭和十九年九月まで

大正十年生まれの徴兵検査で第一乙種合格でしたが現役に編入され、昭和十七（一九四二）年三月、広島部隊に入隊、直ちに下関港出港、釜山港上陸、鮮満国境通過、朝霧漂う公主嶺駅に下車し、満州第六〇一部隊に入隊しました。この第六〇一部隊は公主嶺学校の中の一部です。昭和十九年春、戦局が厳しくなり、我々の部隊以外の在満部隊は、ほとんど南方戦線へ派遣され、学校は閉鎖されました。

よく聞かれる初年兵当時の私的制裁は全くなかったと言えば嘘になりますが、関東軍司令部からの私的制裁禁止の通達の効果があったのか、恨むほどの酷い制裁はなく、助かりました。

また、私は旧制中学を卒業しているので幹部候補生の受験資格があり、受験を勧められました。しかし私は生まれ付き足関節が悪く、例え進級して部下を指導する立場になったときなどにも、模範的指導を行う自信が無いので固辞し続けました。

第三章 山神府駐屯期間

昭和十九年九月から昭和二十年六月まで

昭和十九年九月初旬、黒河省山神府に移動しました。山神府は国境の町、黒河の近くに位置し、冬の寒さは厳しく、風呂場から兵舎までの距離は、幾らもありませんが、歩いている間に持っているタオルが棒状に凍結するほどでした。このような寒さの中、天幕を張り、寒天に北斗七星を仰ぎ、故郷や家族を思い出しつつ露営したこともありま

す。
昭和二十年の初め、所属していた師団が内地に移動し、残留した我々は新しく駐屯した第一二五師団に編入され、当地の警備の任に就きました。詳しい情報は我々の耳に入りませんが、どこからとなく内地の戦局がいよいよ急を告げる状況になっていくことの噂が広がってきました。

六月、師団移動命令が発令され、移動先は遠い南の吉林省通化県でした。

第四章 通化駐屯期間

昭和二十年六月から昭和二十年八月まで

通化省の首都である通化市には日本人の在住者が多く、移駐当初は日本人小学校の一部を師団司令部が借りていましたが、後ほど、某公署に移転しました。日夜整備や警備など軍務に忙殺されているうちに、だんだん戦局が窮迫してゆくように感じられるようになって来たころ、日本が無条件降伏したことが伝えられました。

ここで、六十数年前のことですので、日時地名等間違いあるかもしれませんが、入隊から終戦までに、見聞きしたことを私見を加えつつ述べてみたいと思います。

その一 在満青年男子総動員

七月初めごろ、軍人としての体格や健康が適しているかどうかの検査もなしに、動員、入隊させ、軍装は、銃も帯剣も無く、水筒は竹筒、洗濯するとボロボロになるような生地 of 軍装だったのです。昔の武士であるまいし、丸腰の軍人が、兵器類が米英軍の援助によって優れ、新鋭になった敵に対

して、どのような戦法で戦わせるのか、また戦うのか、私には想像すら浮かんできません。

その二 関東軍司令部の幹部の動向

七月半ばから、軍の幹部の乗用車が頻繁に市中を走るようになりました。

将官は黄色、左官は赤色、尉官は青色の小旗を車の先に付けて走ります。噂によると関東軍司令部の移動じゃないか、悪く解釈すれば逃げ回っているのではないかと言われてもおかしくない行動でした。

その三 民間人の引き揚げ

七月の下旬ごろから、郊外を走る鮮満国境の満州側の輯安に向かう列車の客車と貨車（有蓋車・無蓋車）にはあふれるほどに邦人が乗った専用列車が頻繁に運行するようになりました。

いよいよ想像していたときがきたと感じました。邦人たちが果して輯安に無事着き、鴨緑江を渡り、長距離の朝鮮を縦断し、玄界灘から故国に無事たどり着けるだろうか、ただ無事に元気で本

土の土を踏むことを祈るばかりでした。

その四 終戦

八月八日、ソ連の宣戦布告を受けました。多方面からソ連軍が侵攻してきたとの情報が入ってきた翌日か翌々日でした。早朝、野外へ集合命令が出て外へ出ますと司令部構内にソ連兵らしい二、三人の姿が見えました。近づいて見ると正しくソ連兵で、その姿は今でも目に焼き付いて離れませんが。それは、夏なのに薄い外套(礼服とも見える)を着用し、肩には銃をぶらさげて警戒している様子でした。

その銃たるものは見たこともない形をしており、その銃身の中央部に丸い形のワッパが付いていて、日本兵は普通、銃は右手で支え銃口を上にして肩にするが、ソ連兵は銃口を地面に向けて肩からぶら下げて立っています。

隊長が出てきて「突然侵入してきたソ連軍に対して決して発砲しないように現在話し合い中である」ことを伝えて戻りました。

上官に妙な格好の銃のことを質問しますと、あれは自動小銃で、引き金を引くと自動的に七十数発が発射できる新鋭小銃と聞かされ吃驚しました。日本軍が使用している古式の三八式歩兵銃とは天地の差である。

ソ連はドイツとの戦争では随分苦労しましたが、このような新鋭兵器を第一線に使用して勝利したことを思うと同時に、日本の技術の劣等さに怒りが湧き上ってきました。日本人はよく模倣技術に優れているといわれますが、他国に駐在する日本人が技術の習得ができなかったのか、技術者との接触の機会もあり、軍事訓練も見ているのにと、全く情けない次第で、悔やまれてなりませんでした。

その後、無条件降伏の情報があり、口開く者は誰一人おらず、皆呆然として座りこんだままでした。しばらくして隊長から「無条件降伏したのだから当然兵器類はソ連に引き渡すことになるだろう。また我々の身分は今のところ分かんないが、お

そらくソ連の捕虜として扱われると思うので気丈にして、一日も早く祖国の土を踏めること祈り、健康に留意し、ソ連の指示に従うように」との言葉でした。

そしてこれまで、毎日精魂込めて手入れた兵器類を涙ながらソ連に引き渡し、身軽になりました。

その後、吉林に集結、大隊単位に分かれて貨車に乗せられ北方へ向いました。ハルピンを通過し、松花江の鉄橋を渡る時、昭和十九年九月に、この河を渡ったことを思い出し、今、再び渡ることに感無量の思いで、戦友と感激の涙を流したことを覚えています。

そして北辺の町、黒河に着き、黒竜江の谷底に映る黒い影を見て暗澹とした気分あんたんに襲われました。そこから西進、長距離のシベリア鉄道の貨車の乗客としての旅が続きました。

第五章 復員

いろいろとありましたが、どうにか健康で昭和

二十二年三月、ナホトカ港に集結し、四月二十七日、「米山丸」に乗船、同日同港出発、四月三十日、舞鶴港に上陸しました。

五年ぶりの祖国、日本の土を踏み付けた途端、我々は元気で無事、本土を踏みました。満州で無事に帰国することを願って船詰めふねづめの列車にいた邦人たち、果して無事に本土の土を踏んだらうかと心配になりました。

復員手続きを済ませ、待望の故郷の家族はじめ皆様の歓迎を受け、久しぶりに白いご飯を頂いた時のおいしさは、今だに忘れられません。

最後に我々戦争被害者は、戦争の悲惨さを後世に伝え、二度と戦争の無い幸せに暮らせる国づくりに励むことを望むと共に、戦争犠牲者の皆様の霊に、哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り致します。